

# 響きあい Vol.6

平成 31 年 1 月  
冬号

みんなの「生きる」を  
社会福祉法人

—職員親睦会（伊勢神宮）—



老人福祉施設カリヨンの郷  
施設長 早川直也

新年おめでとうございます。

現時点では新元号は想像もつきませんが、「平成」の次の新しい時代に向かっていることだけは、実感しています

「平成」を一言でいえば、本当に多くの大災害に対し「人間の無力さ」を知らされた時代でした。また、昭和のど真ん中を生きてきた私自身も今の流れに流されまい、と精いっぱい「今の常識」が「昭和世代人間では非常識」になり、戸惑うばかりです。

特に福祉の仕事は、対人援助が中心であるため、何よりも「心のゆとり」が欲しいものです。

特に最近の若者は「愛情不足に陥っているのではないか？」と改めて感じています。「生理的欲求」と「安全欲求」は充足されていることが前提で、「社会的欲求（帰属欲求）」が基準で、これが希薄だと人は孤独感や社会的不安を感じ易くなると言われます。自己主張をすることなく、極力相手とぶつからないよう

気をつかう。SNSなどで、同情を期待し、「いいね！」を求め、残念ながら周りに迎合し、「本当の自分でない仮面」を被って自己保身している気がしてなりません。

受け取る愛情が少ないと与える愛情も希薄になり、母子関係などで成立する「無償の愛」は、言い換えると、「見返りを求めない愛情」と言われます。無償の愛は「自分の意志でもってその相手を愛し、また、その意思を一番大事なものとす。また、無償の愛は自分自身を愛し自分の意思を尊重し受け入れることがスタートになります。」

前号（秋号）でもふれましたが、人の持つ五感が極端に退化していません。退化したそれを取り戻すには、自然と向き合うことしかないと思います。自分は生かされている身であることが原点で、私自身の反省でもあります。今の便利な世の中にとっぷりと浸かりすぎると退化が加速し、改めて未熟な己を知ること、より強く大きく成長するものだと改めて感じています。

